機械編集にともなう医学中央雑誌の変化

Some Changes in *Igaku Chuo Zasshi* as Compiled by Computer

今 井 義 訓*

東京医科大学図書館

Imai, Y. : Some changes in *Igaku Chuo Zasshi* as compiled by computer. *Igaku Toshokan* 31 (1) : 50-52, 1984. *Igaku Chuo Zasshi* (*Japana Centra Revuo Medicinae*) has been compiled by computer since April 1983. With the introduction of computerization, some changes have appeared in publishing and indexing. These changes are examined from the point of manual literature searches. Notably, the new subject index is more difficult to use than the old one, because the new subject index does not fully explain the content of the literature indexed. With a view to correcting this problem, it is pointed out that the new subject index needs to adopt more index terms to be detailed.

I. はじめに

医学中央雑誌(以下医中誌とする)は、1983年4月発行の3277号から、電算機による編集にきりかえられた。これは、医中誌の主題領域の医学文献情報の大量生産化と、それにともなう情報の機械処理の必要性が顕著になってきた動向の中で、医中誌の将来の方針について、数年来検討がつづけられてきた結果に基づくものである。

その結果は、「コンピュータ利用による(データベースを志向した)機械編集を行うべきである」というものであった。

医中誌の編集方法に対しては、医学図書館の側からもたびたび利用者としての要望を述べてきた経緯からここの新「医中誌」を使用した感想を記して、その責をふさぐことにする。今回の機械編集の導入は、将来の機械検索を志向したものとなっているが、現在は冊子体の刊行のみが行われており、ここではマニュアル検索の立場からのみ考えてみたい。機械編集にともなう変更の主な点は次のようである。

II. 発行の形式・形態の変更

毎月3回発行、年間36冊で1巻となり、それぞれの号に、抄録の部・索引の部がある。抄録の部の分類科目及び組み体裁はいままでと変わらないが、文献の識別がこれまでの頁数のみの指示から、1文献ごとに文献番号が付されるようになった。索引の部は、人名索引・件名索引(欧文・和文)があり、年間の累積索引ができるようになった。別冊として、統制用語集である「医学用語シソーラス」と「医学中央雑誌 利用の手引き」が刊行されている。また、本のサイズがA4版とひとまわり大きくなった。

機械編集によるこのたびの変更によって、抄録と索引が同時に刊行されることにより、主題検索を迅速に行うことが可能となり、また年間累積索引の刊行で、遡及検索がいままでに較べて容易となることが期待できる。また、原報発表から医中誌への収載までの、タイムラグの縮小化も、機械編集に期待される利点の1つである。

しかし、こういう利点が効果を発揮するためにも、索引方法が使い易いものであることが前提となる。

* Yoshinori IMAI : Tokyo Medical College Library, 7-1 Nishi-shinjuku 6, Shinjuku-ku, Tokyo 160, Japan.
(昭和59年2月14日 受理)

III. 索引方法・索引語の変更

これまでの医中誌の物件索引におけるように、見出し語の下に自由な修飾語句がつく索引方法から、MeSH方式の「医学用語シソーラス」に基づいて、統制された索引語・副標目・チェックタグ(これは冊子体の索引には登場しないが、将来の機械検索のためのもの)による索引方法への変更が行われた。こう書いても、具体的に何がどう変わったのか明瞭でないが、変更の結果としての新「医中誌」の件名索引を使ってみての印象は、いままでより引き難くなったのではないかという戸惑いである。ではその原因はどこにあるのだろうか。

1. 件名索引をもっと詳細に

索引誌・抄録誌の使い勝手に、もっとも影響するのは、索引方法・索引語である。この面から、新「医中誌」の使い難さの原因を考えてみたい。

“大腿骨頸部疲労骨折の1例”という文献の索引方法を、新旧医中誌で比較してみると、その件名索引は

(旧) 大腿骨—頸部疲労骨折(修飾語)

(新) 大腿骨—外傷・損傷(副標目)
骨折

となり、この文献を特定するために、旧では索引の1項目にあたればよいが、新では外傷・損傷という副標目で包括されるいくつかの文献を、6桁の文献番号をもとに抄録の部で探して、論題または抄録で、骨折に関するものかどうかを、確めなくてはならない。これが機械検索なら、大腿骨と骨折という索引語をかけ合せればよいのだが、マニュアル検索で、長い番号のついた文献を、いくつもたどりながら、必要なものかどうかを確めていくのは、根気のいる作業である。

これがIndex Medicusのように副標目の下に、すぐ文献の記載がある索引誌の場合は、難点にならないが医中誌のように、抄録の部と索引の部が別になっている場合は、件名索引を見ただけで、一つ一つの文献の内容が、ある程度まで識別できる索引方法でないと、利用者にとって使い難いものになる。

すなわち、医中誌の索引方法としては、索引で一つ一つの文献が識別できるように、主たる索引語の下に何段階かにわたって、修飾語としての索引語が並記されるとよいであろう。いまの索引方法では、個別的な概念を表わすのは、第1段階の索引語のみで、第2段階以後の副標目は、索引語の下にまとめられた文献群を、いくつかの観点から細区分した、集合的な概念を表わすものとして使用されている。

この点を変更しないと、マニュアル検索にとって使い易い索引方法にはならないであろう。

たとえば“ファロー四徴症の術後に髄膜炎を併発した1例”という文献について

Fallot's tetralogy／合併症

髄膜炎／合併症

という索引でなく

Fallot's tetralogy—髄膜炎／合併症

という索引があれば、ずっと使い易いということである。個別的な索引語の組合せがあると便利なのである。

2. Excerpta Medicaと比較して

医中誌と同じ形式をとる、医学分野の抄録誌であるExcerpta Medica(以下EMとする)と比較してみると、こちらは電算化の歴史はずっと古いのであるが、コンピュータ典拠ファイルに載っている索引語が18万、同義語が25万であるという。医中誌の索引語の10倍である。しかし索引語の数が多ければ、使い易い索引ができるというわけではなく、要はその使い方にあるのであろう。こんなに膨大な数の索引語を採用したら、印刷体のシソーラスの作成は不可能となり、コンピュータ上のファイルのみとなる。マニュアル検索で利用する医中誌としては、印刷体のシソーラスができる範囲内の用語数でないと都合がわるい。

またEMは、件名索引が文献の内容の、ミニアブストラクトとして役立つほどに、多くの索引語を使って作られている。EMと医中誌のある号をとって、抄録の部と件名索引の占める頁数を比較してみたら、次のようであった。

EM	抄録	300 件	63 ページ
	件名索引		34 ページ

医中誌 抄録 4,510 件 174 ページ
件名索引 34 ページ

医中誌も、件名索引にもっとスペースをさいてよいであろう。文献の内容に応じて、現在のような索引語と副標目の組合せだけでなく、いくつかの索引語の組合せもとりにいれて、もっとこまかい索引方法をとるべきである。

IV お わ り に

新「医中誌」の使い難さの原因について、索引方法の面から検討してみた。しかし、医中誌の機械編集はまだ始まったばかりである。以前の方が使い易かったといった懐古的な感想にとどまらず、将来の機械検索への志向を含めて、改訂が加えられていくことを期待したい。

お 知 ら せ

編 集 委 員 会

29 巻 1 号から“Q & A”のコーナーを新設しました。

日頃、疑問に思っていること、“この項目について深く知りたいのですがどんな資料がありますか”といった様なこと、あるいは“利用者から受けた質問で返答をしましたでしたがさらに詳しい事が知りたいのですが”等等…の質疑応答を誌上で展開し、読者との交流の場としたいと思います。

質問をどしどしお寄せ下さい！

質問文の長さに制限はありませんができるだけ簡明をお願いします。誌上匿名も自由ですが、原稿には、氏名・所属を明記して下さい。

なお、解答者は、編集委員会に御一任下さい。可能なかぎりお答え致します。